

地方都市の演奏団体の広報戦略法

— 滋賀県立芸術劇場びわ湖ホールの《三文オペラ》上演を中心に —

川端眞由美^[1] 植草学園大学発達教育学部
柴辻 純子^[2] 植草学園大学発達教育学部非常勤講師

本研究は、平成25（2013）年度の新国立劇場地域招聘オペラとして上演された滋賀県立芸術劇場びわ湖ホールの《三文オペラ》の公演を通して、地方都市のオペラの演奏団体が東京で公演するに当たり、知名度を高めるためにいかなる施策を講じているかを追跡する事を旨とする。そこから理解できる事、学ぶべき点を捉えて、地方都市の大学が生き残りをかけて挑むべき広報戦略法を探る事を目的としている。

若い世代の育成は、未来への投資である。幼児・初等教育の指導者を育成する場でもある本学は、まもなく開学7年目を迎える。そろそろ本腰で長期的かつ計画的な視点の下に、全国的な知名度獲得を目指した綿密な戦略法を練り上げる必要性があろう。そのために参考となる情報を探りたい。

キーワード：地方都市、広報戦略、知名度、びわ湖ホール、三文オペラ

1. はじめに

平成25（2013）年度の新国立劇場地域招聘オペラ公演が7月12・14日にあり、滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール（以下、びわ湖ホール）の《Die Dreigroschenoper 三文オペラ》の上演を鑑賞する機会を持った。今回の公演は、びわ湖ホールの設立15年目を記念すべく、全力投球で臨んだ一大イベントであった。新国立劇場の中劇場は満席で、聴衆の満足度がよくわかる質の高い演奏と演出であった。

筆者は、評論執筆活動を通じて、都内および近郊の演奏会に定期的に足を運び、また複数の財団に外部評価委員として関わる等、公演の音楽面のみならず、幅広い視点から意見を述べてきた。また地方の音楽活動についても、びわ湖ホールをはじめ、多くのホールで鑑賞してきた。こうした経験から、全国の多数のコンサートホールのなかでも、びわ湖ホールは、ハード・ソフト両面においてトップクラスのホールである。それは、施設の整備や公演内容の充

実のみならず、常に創造的な活動を行っていることから評価されよう。

またびわ湖ホールとの関わりとして、2007年の第35回定期公演「オペラの饗宴」のグルックのオペラ《オルフェオとエウリディーチェ》のアリアの公演に際して、原文のイタリア語からの対訳を提供した事が挙げられる。それ以後、東京公演に際しては毎年招待状が送付されるようになり、今回に及ぶ。それまでの東京公演における、びわ湖ホール声楽アンサンブルによる様々の時代の作曲家の作品の合唱曲の演奏に際しては、其々の作曲家の様式美を丁寧に醸し出しており好印象を受けていた。2013年2月のモンテヴェルディの《ポッペアの戴冠》の上演に関する印象は、質は高くまとめられているが、バロック・オペラの発声法や、ブッフアの部分をさらに強調する事で聴衆を楽しませる事ができたであろう事等を感じていた。

本論は、今回上演された《三文オペラ》の個々の部分の演奏に関して音楽的、演劇的な視野に立って

[1] 著者連絡先：川端眞由美

[2] 柴辻 純子

論じて行く事が目的ではない。地方都市のオペラの演奏団体が東京での公演に向けて、どのような特色を盛り込もうと努力したかを追跡する事で、この公演から理解できる事、学ぶべきものを捉え、地方都市の大学が生き残りを賭けて臨むべき様々な活動に役立つ要素を探る事が目的である。

2. びわ湖ホールの概要

2.1 びわ湖ホールの施設概要

びわ湖ホールは、文化発信の拠点を目指して、滋賀県が1995年から3年をかけて245億円を出資して建設した施設である。1998年9月5日に開館記念「オープニングガラ」の公演で開館された。アクトシティ浜松（1994年）、新国立劇場（1997年）に次いで日本で3棟目となる本格的な4面舞台を備える大ホールの他、中ホールと小ホールを付帯する舞台芸術専用のホールである。大ホールの客席数は1848席（1階：755席 2階：435席+車いす席4席 3階：372席 4階：282席）で、2164㎡の4面舞台と最新の舞台特殊設備が、多彩な演出と素早い舞台転換を可能にしている。また走行式音響反射板をセットすることにより、クラシック音楽にも適切なコンサートホールになる。このようにオペラ、バレエ、ミュージカルなどの音楽劇をはじめ、クラシック音楽の演奏に優れた音質、美しい響きと音量を提供できるホールとなっている。

音響家が選ぶ優良ホール100選に選ばれたり、平成23年度には、「西日本に初めて誕生した本格的なオペラ劇場として、開館当初から芸術監督によるプロデュースオペラや子どものためのオペラを制作。日本で唯一の専属声楽アンサンブルを有し、アウトリーチや地域の演奏団体やホールとの協働事業を行うなど、“関西オペラの拠点”として音楽文化の振興と普及に貢献した。」という理由により、地域創造大賞（総務大臣賞）を受賞した。ホール・設備・音響そのものの素晴らしさに加えて日本離れした美しいロケーションのために、イタリアのソプラノ歌手M.フレニーは「びわ湖ホールをイタリアに持って帰りたい」と語ったと言われている。

2.2 びわ湖ホールの事業内容

びわ湖ホールは、現在、自主事業、普及事業、共催事業合わせて年間約80事業、200程度の公演を実施している。大規模のオーケストラからリサイタルまで、あらゆる規模の公演が施設内の3つのホールで上演可能である。事業内容は多岐にわたるが、ここではオペラ公演のみについて触れたい。オペラ公演は、開館以来、ホールの中核を担う事業であり、2007年4月に指揮者の沼尻竜典が第2代芸術監督に就任してからは、「びわ湖ホールプロデュースオペラ」、「沼尻竜典オペラセレクション」、「びわ湖ホールオペラへの招待」の3区分で年間4～5本のオペラを自主事業として制作している。公演水準は高く、関西圏のオペラ上演の拠点と位置づけられ、文化庁から継続的な支援も受けている。

新国立劇場以外、国内で年間にこれほどの数のオペラを継続的に自主制作しているホールは他に例がない。プログラミングにもきめ細かな配慮が行き届き、充実した成果を上げている。「プロデュースオペラ」は、神奈川県民ホール、東京二期会と共同制作で年に1本制作され、各々のホールで2公演ずつ、ダブルキャストで上演される。2013年度は、神奈川フィルハーモニー管弦楽団と日本センチュリー交響楽団が加わった5者の共同制作となり、文化庁の「芸術・音楽堂等活性化事業」（共同制作支援事業）に採択された¹⁾。「オペラセレクション」は、欧州の歌劇場との共同制作による公演等、独自性・話題性のある公演を制作している。「オペラへの招待」は、これからオペラを観る観客のための入門篇として、有名な作品や日本語によるオペラ等、中ホールで2～3本の公演が企画されている。

2.3 びわ湖ホール声楽アンサンブル

さらにホールの創造活動の核として役割を担っているのが、開館年の1998年3月に公共ホールとして日本初の専属団体として設立された声楽家団体「びわ湖ホール声楽アンサンブル」である。オーディションで選抜された16名（ソプラノ、アルト、テノール、バス各4名、最長雇用3年）が、上記のオペラ公演のソリストや合唱として、また各種自主事業や普及事業、オーケストラの定期演奏会等に出演している²⁾。1.で指摘した東京公演も、そのひと

つである。バロック音楽から20世紀の作品まで幅広い時代をレパートリーとして評価を高めている。本年度は、16名のメンバーに加え、過去にアンサンブルに在籍した34名がソロ登録メンバーとして参加し、公演ごとに演目に相応しい歌手が選ばれている。

3. 東京公演の《三文オペラ》

3.1 《三文オペラ》とは

《三文オペラ》は、ドイツ演劇界の革命児ブレヒト Bertolt Brecht (1898-1956) の戯曲に、ワイル Kurt Weill (1900-1950) が音楽劇として作曲して、1928年8月31日にベルリンのシッフバウアーダム劇場のこけら落としとして初演されて大成功を収めた作品である。以来《三文オペラ》は世界中で上演され、ワイルが作曲した劇中歌はヒット曲となった。特に大道歌手が歌う〈メッキー・メッサのモリタート〉は、〈マック・ザ・ナイフ〉のタイトルで大ヒットし、今でも圧倒的な人気を博している。演劇であり、オペラであり、ミュージカルでもあり、既存の枠組みに収まらないこの作品は、資本主義社会をアイロニカルになぞっている³⁾。愛憎や嫉妬など、市民社会がそのまま映し出され、初演から大成功を収めた。登場人物は、乞食や盗賊、娼婦達といった裏社会の人間で、弱肉強食の社会をあてこすり、茶化しあざ笑う内容である。下品で卑猥な歌詞は、良識ある当時の人々の神経を逆なでしたことであろう。第一次大戦後のドイツの人々が親しんでいたワルター・フルトヴェングラーといった当時の偉大な指揮者によるオペラとは大違いのまさに三文オペラであったに違いない。

3.2 東京公演の《三文オペラ》

東京公演の《三文オペラ》は、2.2で述べた「オペラへの招待」として2012年に新制作されたプロダクションの再演である⁴⁾。びわ湖ホールアンサンブルのメンバーが出演して、オペラ界の重鎮、栗山昌良の演出、園田隆一郎の指揮、ザ・カレッジ・オペラハウス管弦楽の演奏で日本語上演された（日本語訳：小林一夫）。

日本では1932年の初演以来、数々の劇団がこの作

品を上演してきた。なぜならこの作品は、オペラというよりも演劇に近く、一部に歌手を起用することもあるが、多くは歌える役者が登場人物を演じてきたからである。それゆえに音楽に意識が向けられず、歌の部分が疎かになったり、敢えて崩して歌う上演もあった。近年は、歌える役者や演技のできるクラシックの職業歌手が増加してきたこともあり、演出家主導の舞台が制作されるようになってきた。びわ湖ホールの栗山の演出は、歌手として正確に歌うことと同時に、シンプルな舞台装置で最大限の芝居をすることを要求した。ブレヒトは、「歌をうたうことで、俳優はひとつの機能転換を行う」⁵⁾として俳優が会話から無意識のうちに歌に移行するような表現を嫌い、身振り、会話、歌唱のそれぞれが分離されながらも、ひとつの総体を成すように求めた。栗山は、まさにこのブレヒトの言葉どおり、歌手に演技力を要求することで、歌唱も演技も同等の比重となる舞台を作った。若手の歌手にとっては、ハードルの高い演出であったが、初日は緊張していたものの、日頃の稽古の成果が伝わってきた。

4. 新国立劇場地域招聘公演

新国立劇場では、「現代舞台芸術に関する地域交流の観点」から、2005年度より全国各地で上演されている優れたオペラを招聘して地域オペラ団体等との共催で地域招聘公演を行っている。これまで2005年度「ザ・カレッジ・オペラハウス」の松村禎三《沈黙》、06年度「ひろしまオペラルネサンス」のモーツァルト《フィガロの結婚》、08年度「関西二期会」のR.シュトラウス《ナクソス島のアリアドネ》、09年度「札幌室内歌劇場」のオルフ《月を盗んだ話》、11年度「仙台オペラ協会」の岡崎光治《鳴砂》、13年度「びわ湖ホール」のワイル《三文オペラ》が招聘された⁶⁾。各団体を取り巻く状況は様々で、オペラを定期的に上演している団体、地域の合唱活動を支える団体など、地域と密着した活動を行っているため、公演水準に多少バラつきはあるものの、地域招聘公演事業は、地方のオペラ活動を紹介する意義ある企画として高い評価を受けている。また地方の団体にとっても、新国立劇場での上演は、公演水準向上のための貴重な機会となっている⁷⁾。

第1回～第3回は、関西圏で継続的にオペラを自主制作している団体が大作を上演し、文化の東京一極集中への危惧を払拭するべく成果を上げた。第4回の初の東日本の団体となった札幌室内歌劇場は、グリム童話を元にオルフが作曲したオペラを独自の日本語訳と編曲で2005年に日本初演した作品を紹介した。この団体は、常設の劇場をもつオペラ団体ではないが、オリジナルのオペラの創作や演出において実験的な取り組みを行ってきた同団体のユニークな活動の一端が示された。

前回の仙台オペラ協会の《鳴砂》は、1986年に初演されたオペラの改訂版で、東北の漁村で起こる男女の愛憎と自然への冒涇をテーマに描いた作品であった。公演日が東日本大震災から半年も経たず、津波を連想させる場面もあることから、公演の実施すら危ぶまれた。しかし公演当日は、中劇場のホワイエに大漁旗が掲げられ、気仙沼の「鳴砂」に関するパネル展示や実際に砂を鳴らす体験など、地域色を打ち出した数々のもてなしと、復興にかける情熱とが相俟って、筆者も開演前から胸が熱くなった。舞台からも稽古を重ねてきた出演者たちの並々ならぬ意気込みが熱演となって伝わってきた。震災の復興のシンボルとなる公演として位置づけられ、地元宮城県から多くの観客が来場したことも特筆されるだろう。

ただやや厳しく批評すれば、札幌室内歌劇場と仙台オペラ協会は、地元で活動する音楽家を中心に結成された集団で、長年かけて培ってきたものはあるが、音楽面においては、全員が同じ水準を保っているわけではない。そのため配役等の工夫で補わざるを得ないし、オペラ専門の団体ではないため、歌手の演技においてはさらなる訓練が必要だと思われた。これらの団体と比較すると、今回のびわ湖ホールは、恵まれた環境のもとで制作された公演であることがわかる。2.3で述べたとおり、歌手たちは厳しいオーディションに合格した若手で、専用の劇場で十分な稽古を重ねてきている。それでも舞台では若さゆえの生真面目さも出てしまい、ブレヒトの台本に仕込まれた毒や生々しさが、ワイルの抒情的な音楽の合間からもっと伝わってきてほしいと感じたものの、将来性や可能性を示した舞台は、再演を重ねていけば、さらに完成度の高いものになるだろう。

5. 知名度獲得のための広報戦略

5.1 東京公演の広報戦略法

びわ湖ホールによる今回の《三文オペラ》の東京公演は、舞台芸術というジャンルに誰もが親しみをもち、楽しく鑑賞できる工夫が随所に施されていた。そして次の公演での演目を期待させ、再来場を促す力がある事を感じた。その力の源は何であろうか。

一部のオペラファンの間ではびわ湖ホールの音楽的質の高さはすでに知られてはいるが、今回の地元のびわ湖ホールの上演は、新国立劇場招聘公演を機会に更なる知名度を高め、関東及びそれ以北の人々、即ち日本中の聴衆に広めるためにあえて打って出た大胆な挑戦であったのではなかろうか。今回の《三文オペラ》は地元ですでに上演され、好評を博した作品に改良を加えて、強烈なまでの独自性や地方色を織り交ぜたものであった。日本語上演でありながら、アリアやソングの部分のみに字幕が入り、赤裸々な歌詞が目からも飛び込んでくる。さらに、中劇場を思う存分使用した演出で、大団団での客席をも巻き込んだ舞台設定、宝塚歌劇団のシャンシャン（公演をイメージした小道具）や羽根扇を振りかざしながら大階段を降りてくるフィナーレにも類似した演出、びわ湖ホールの宣伝を歌詞に散りばめた部分の使用等、少々やり過ぎではと思わせながらも、最後まで観客を飽きさせずにその心を鷲掴みにする演出は見事である。

さらに、新国立劇場を満席状態にする動員力には驚かされた。2回の東京公演の2日目は、日曜日のマチネーであるため当然多くの聴衆及び筆者のような招待客で埋め尽くされる事は承知していたが、中劇場の最後部はびわ湖ホールのファンや関係者、恐らく今回の演目には出演しない合唱団員等が座を占めていたようで、アリアやソングの度に舞台上の歌手に熱狂的な喝采を浴びせていた。近頃の日本での慎ましやかなオペラ鑑賞に慣れてきた筆者には、ローマやナポリの歌劇場で体験した熱狂的なファンの声援を思い出させてくれる上演であった。

自前の上演を実際に高く評価してその場で称えると同時に、中劇場のホワイエ全体を活用して滋賀県の広報活動が行われていた。その床には大きな琵琶

湖とその周辺の地図が描かれ、史跡の写真がはめ込まれ、びわ湖ホールの所在がことさらに強調されて描かれていた。幕間の度に劇場に出入りする聴衆は、嫌でもこの地図を踏んで通らなければならない。さらにあらゆる場所に滋賀県の名所旧跡とびわ湖ホールの広報誌やパンフレットが置かれていた。びわ湖ホールだけではなく、滋賀県のびわ湖ホールである事を強く印象付ける宣伝を行っていた。

5.2 公共ホールの広報戦略

地方自治体が財団で運営するホールや劇場は、地域の拠点として地元へ根づいた活動が求められる。すなわち地域住民の鑑賞機会を充実させるとともに、地域の芸術関係者の事業への参加が不可欠である。びわ湖ホールでは、まさに声楽アンサンブルが地域に密着した音楽活動ができる歌手たちで結成され、また観客に公演をより良く、深く理解してもらうために様々な工夫がなされている。例えば、公演前もしくは公演後に「プレトーク」、「アフタートーク」として、舞台上で指揮者や出演者等が音楽について語る機会は他のホールでもよくみられるが、びわ湖ホールの場合は、さらに踏み込んで、公演に向けて段階的な企画を立てている。関連事業として事前に講師を招いてセミナーを開催したり、公演の聴きどころをロビーコンサートで紹介する等、こうしたきめ細かな計画が、鑑賞機会を充実させるとともに、公演を広く周知させ、集客に結び付けていると考えることは想像に難くないだろう。建物は建っているけれども、その中でどのような活動が行われているかわからない、あるいは敷居が高くて、と躊躇する地域住民に対しても発信力が高いと感じた。

独自の試みとしては、今回の《三文オペラ》では、公演のチラシやポスターのデザインを、地域の大学と連携して授業の中で学生に制作してもらい、コンペで採用されたデザインが使用された⁸⁾。これもホールの事業を周知してもらうためのひとつの方法である。同じ芸術専攻と言っても、音楽と美術で必ずしもフラットな関係にあるわけではない。音楽を知らなくてはデザインのアイデアも生まれないので、若い世代にホールに関心を寄せてもらうきっかけ作りにもなっている。東京公演では制作されたすべてのデザインがロビーに展示されたが、学生の

発想力の豊かさに感心させられた。こうした地道な努力の積み重ねが、知名度獲得の要因になっていると言えるだろう。

5.3 本学が利用できる戦略法

本学は、地域の保育園・幼稚園・小学校・特別支援学校等との連携を密に図り、学生の積極的なボランティア活動を支援している。また地元ばかりではなく、東日本大震災以後、被災地への夏休み期間のボランティアも続けている。さらに毎年実施されている公開講座等を通して、地域に根差した大学を目指した活動も展開している。また学生の就職情報としては、25年度の千葉県教員採用試験において、本学の聴覚障害の学生が特別支援学校の採用合格となった。これは本人の努力とそこへと導いた教職員等の指導力の結果であり、公表できる大きな成果である。今後本学が歩むべき一つの方向性を示すものであろう。これらは、本学の知名度を確固たるものにする広報活動として重要である。それでもびわ湖ホールの徹底した地域密着と地域に開かれた活動から学ぶべき点はなおも多い。本学もキャンパスをオープンにする取り組みにこれまで以上に積極的になる必要があり、地域の方々の学びの場として、本学の授業等への参加も考えられよう。

地域に開かれた授業の例としては、平成21年度の「幼児・児童音楽演習」が挙げられる。この授業では保育・教育現場を想定して、リズム遊び・生活の歌・弾き歌い・わらべうたを組み入れた指導案の作成とその指導法、およびそれに基づく発表を行った。その後、学生の討論を交えて工夫・改善をして、本授業の終了後、「親子で楽しむわらべうた」(本学相談支援センター主催)のプログラムの中で、地域の親子を授業の中に招待して、わらべうたを通して学生との交流を図った。こうした活動をさらに拡大・充実させ、継続させることが今後さらに求められるだろう。地域住民の本学で学びたい要望は多々ある。筆者の公開講座の受講生より詳細な内容を勉強したいので公開講座の回数を増やすか、聴講制度を知りたい等の積極的な参加の希望がある。

また、学生確保に関しては、本学のオープン・キャンパスに訪れた受験生を手離さず、入学後の計画的な学生生活の積み重ねの上に、免許・資格取得

と就職まで視野に入れた学びの設計図の組み立てにも、5.2で指摘したようなびわ湖ホールの取り組みは大いに参考となるであろう。現在本学で行っている入学前指導は、福祉・教育等に関する新聞記事の感想であるが、筆者が短大で指導していた時期にはピアノ対策も盛り込まれていた。現在大学では、保育士・幼稚園教諭を希望する学生が多い事から、入学後にピアノの授業が必修となる学生が多い。しかし現状は、ピアノに全く触れる事なく入学して、必修科目となり苦勞している学生（特に男子学生）が受講生の3割程度いる。さらに楽譜が全く読めない学生も多い⁹⁾。これらの学生の中には、半期の必修科目を不可の連続で4年間かけて履修したり、努力できずにピアノの授業を諦めて資格・免許が取れない学生もいる。そこで、入学までの数カ月をピアノの練習を含む入学前指導のプログラムの提案をしたい。短大時代にそのプログラムは作成しているので、大学用も可能である。ある程度の課題を指定する事で、学生自身も入学後の負担が少なくなり、積極的な授業参加に繋がると考える。

さらに、学生の質を向上させるためには、指導する側の高い指導力とその基盤となる学術的質の高さが必要不可欠であろう。筆者が参照としているびわ湖ホールの躍進は、まさにそこにあると考えるからである。

6. まとめ

びわ湖ホールの知名度を全国的な水準に高めるために、関係者が取り組んでいる点を以下にまとめてみる。第1に演奏者の人選である。質の高い演奏技術と演技力を兼ね備えた逸材発掘のために全国に公募を掛け、集まった演奏家を公正且つ適切な審査の下に採用試験を実施している。第2は徹底的に地域色を追求している点である。東京公演の合唱アンサンブルの団員の服装は、近江上布や本藍染といった滋賀県の伝統的工芸品を使用したドレスであった。今回の《三文オペラ》の栗山の演出では、琵琶湖周辺をアピールする要素が含まれていた。県立の芸術劇場であるために、まずは滋賀県を知ってもらい、滋賀県に観光に来てもらい、滋賀県の良さを知ってもらう。そして滋賀県が世界に誇れる芸術劇場があ

る事、そこで上演されるびわ湖ホールの演奏を素晴らしい環境の中で鑑賞できる事を訴えていた。

第3に、その上演の質を高めるためにハイクラスの指導者を招聘している点である。声楽の発声法や演技力を高めるためには、上演する演目に相応しい指導者の下で特訓を受ける事となる。ヴェルディの作品の上演であれば、イタリアからその専門家を呼び、ワーグナーの作品であればドイツより招聘するといったところである。

今回の公演を通して、地方都市の大学が生き残りを賭けた知名度獲得のために、大いに活用できる戦略法がある事を学べた。即ち、質の高さの実績（ここでは指導する側の質の高さが問われる事となる）を基盤として、きめ細かく一人一人の学生に相応しい指導体制を敷き、その地域が求める人材に育てて送り出す事が最良の武器となろう。同時に長期的な教育計画も必要になる。公共ホールは単年度予算で事業計画を立てながら、将来の展望をもとに目標を定めるが、大学も学生は4年単位で入れ替わるけれども、長期的視点で到達目標を明示していくことが地道な積み重ねとなるだろう。

その結果、学生の学力向上や就職先への安定した人材供給が可能になれば、受験生の学校評価にも影響を与え、卒業生の活躍を積極的に紹介していくことも、目標になると同時に、卒業後の進路をより具体的に示すことになる。若い世代の育成は、「未来への投資」である。幼児・初等教育の指導者を育てる場である本学は、長期的かつ計画的な視点で戦略を立てることが、これまで以上に求められるのではないだろうか。

7. 参考文献

- 1) Drew, David. "Brecht, Bertolt (Eugen Friedrich)." In *The New Grove Dictionary* 2nd, 2001. 3:247-248
- 2) Drew, David. "Weill Kurt (Julian)." In *The New Grove Dictionary* 2nd, 2001. 20: 300-310
- 3) Stone, Kurt. "Weill Kurt (Julian)." In *Die Musik in Geschichte und Gegenwart Allgemeine Enzyklopädie der Musik*, 2003. 14: 386-389
- 4) ベルトルト・ブレヒト. 三文オペラ. 千田是也訳. 岩波文庫. 1961年
- 5) 文化政策提言ネットワーク編. 指定管理者制度で何が変わるのか. 水曜社. 2004年

8. 註

- 1) 本年度は、ワーグナー生誕200年を記念して、《ワルキューレ》全3幕が、2013年9月14、15日（神奈川県民ホール）、21、22日（びわ湖ホール）で上演された。
- 2) 2010年度は、58公演（自主事業16公演、普及事業38公演）に出演した。
- 3) 《三文オペラ》は、1728年にロンドンで初演されたジョン・ゲイ作、ペープシュ音楽のバラッド・オペラ《乞食オペラ》を下敷きに作曲された。物語は、資本家の真似をして、乞食のあがり巻き上げている総元締めビーチャムの娘ポリーは、ビーチャムと対立する盗賊団の親玉メッキーに誘惑され、結婚する。メッキーは、警視総監ブラウンに逮捕されるが、実は両者は通じていて、強引なハッピーエンドで幕となる。
- 4) 2012年10月6日、8日にびわ湖ホールの中ホールで東京公演と同一の出演者で上演された。
- 5) プレヒト（千田是也訳）「ソングを歌うことについて」p.171『三文オペラ』所収。
- 6) 2009年度は大阪の法村友井バレエ団、2010年度は新潟シティバレエ団が招聘され、2013年度のびわ湖ホールは8団体目となる。
- 7) 中劇場もしくは小劇場で2公演実施される。
- 8) 公演のチラシ・ポスターのデザインは、財団法人地域創造の助成を受け、地域大連携オペラ創造プロジェクトとして成安造形大学の授業で制作された。
- 9) 学生の音楽学習の現状については昨年度の研究紀要第5巻の調査報告『保育者・教員養成課程における音楽科目の指導法研究—植草学園大学発達教育学部における現状と今後に向けて—』において指摘した。

**Media Strategy for a Provincial Opera Group
Performing in Tokyo
—Regarding the presentation of DIE DREIGROSCHENOPER
at the Biwako Hall Center FOR THE PERFORMING ARTS, SHIGA—**

Mayumi KAWABATA^[1] Faculty of Child Development and Education, Uekusa Gakuen University
Junko SHIBATSUJI^[2] Faculty of Child Development and Education, Uekusa Gakuen University

DIE DREIGROSCHENOPER the new production at the Biwako Hall Center for the Performing Arts in Shiga, was performed as the Invitational Program for Regional Performing Arts at The New National Theater , Tokyo, in July of 2013. We base this study on the experience of a performance by a regional opera group in Tokyo, with the desire to investigate whether they take any specific measures to raise their name-recognition among the public. Our goal is to learn from and understand the effects of this case, and investigate modes of public relations that regional universities should adopt in order to survive.

Keywords: regional city, media strategies, name recognition, Biwako Hall, DIE DREIGROSCHENOPER

[1] Mayumi KAWABATA

[2] Junko SHIBATSUJI